



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

リビア・エジプト・米国：預言者を侮辱する映画に対する抗議デモ
—リビア・ベンガジでは武装集団が領事館を襲撃—（報道取り纏め）

主席研究員 中島 勇

米国で制作された映画「Innocence of Muslims」がイスラーム教の預言者ムハンマドを侮辱しているとして、中東各地で抗議運動が起きている。11日、エジプトのカイロにある米国大使館に数千人が集まり、一部が敷地内に侵入して米国旗を引きちぎった。リビア東部ベンガジの米領事館では、抗議デモが行われた他、武装グループが攻撃を行い、駐リビア米国大使を含む4人の米国人が死亡した。12日には、チュニジア、モロッコ、パレスチナのガザなどで抗議行動が発生した。当初、ベンガジの米国領事館襲撃も、一連の抗議行動の一つと見られていたが、その後、同襲撃事件は、訓練されたグループによる計画された襲撃事件との見方が強まっている。今後も、中東地域で、預言者を侮辱する映画に対する抗議行動が続く可能性はあるが、ベンガジでの事件は、こうした流れとは別の背景がある可能性が高い。

米国、リビア、エジプトは、冷静な対応をしている。エジプト政府、リビア政府は、映画には抗議しているが、同時に大使館、領事館襲撃を非難する立場を表明している。エジプトのムスリム同胞団報道官は、このような映画が製作されたことについて米国政府の公式な謝罪を要求するとする一方で、不愉快な映像への抗議行動は文明的でなくてはならず、私有財産の権利を尊重しなくてはならないとデモ隊を批判した。リビア政府は、大使ら4人が死亡したことを謝罪した。トリポリとベンガジでは、米国大使殺害に抗議するデモが行われた。米国のクリントン国務長官、オバマ大統領は、大使の死亡が確認された後、相次いで声明を出した。クリントン国務長官は、扇動的な映画がインターネットに掲載されたとしても、今回のような暴力は正当化できないとし、襲撃は少数のグループによる犯行だとした。オバマ大統領は、襲撃グループに法の裁きを行うとしたが、リビア国民やリビア政府を非難することとはなかった。

ベンガジでは、6月から赤十字国際委員会事務所、米務省の出先機関、英国大使館の車両などに対する小規模な攻撃事件が発生していた。今回の米国領事館攻撃については、まだ不明な点が多いが、こうした一連の襲撃事件と関連があるようだ。領事館での銃撃戦は4時間続いたと報道されている。米国側は、当初死者は1名と発表し、その後4人と修正するなど現場はかなり混乱していた模様である。スティーブズ大使は火災の煙による窒息死と見られるが、同大使が病院に運ばれたときは誰かわからない状態で移送されたようだ。同大使は、米国文化センターの開設式に出席するためベンガジを訪問していた。米国は死者2名

の名前を公表したが、残り2名の名前の発表は遅れている。

映画「Innocence of Muslims」は、米国カリフォルニアで製作されたようだが、監督やディレクターなどの本名はまだ確認されていない。イスラエル系米国人が監督とも報道されたが、偽名の可能性があるようだ。6月頃にインターネットに同作品の一部が掲載され、その後、アラビア語訳がつけられ、在米のコプト教徒の反イスラーム活動家が映画を宣伝したようだ。その映像をエジプトのメディアが取り上げた結果、騒動が拡大した。映画の内容は扇動的であり、かつ作品としてはお粗末極まりないしろものである。

なお、事件の直前にインターネット上でアル・カーイダが製作した幹部の演説映像や広報映像が出回ったことから、ベンガジでの襲撃事件にイスラーム過激派が組織的に関与したとの憶測がでている。しかし、問題の映像での扇動や攻撃教唆は、リビアでの「戦闘と殺害」を呼びかける部分を含むものの、具体性を欠く一般的な内容にとどまっており当然ながら問題となった映画については全く触れていない。また、アル・カーイダの活動は、諸般の攻撃とそれについての政治的主張・広報を連動させることにより初めて「テロ」としての効果を持つものである為、アル・カーイダが今般の襲撃事件に関与していたり、事件を評価したりする場合は、この事件に言及する演説や声明を発表することが予想される。現時点でこのような反応は現れていないため、ベンガジの襲撃事件に関するイスラーム過激派の組織的関与についての諸説は、憶測の域を出ない。イスラーム過激派の関与についての判断は、今後の捜査やアル・カーイダなどのイスラーム過激派の反応を待たねばならない。